

明治時代のエチオピア像（1）

青木澄夫

昭和初期のエチオピア・ブーム

『月刊アフリカ』6月号に、「3枚のエチオピア地図—イタリア・エチオピア（伊エ）戦争と日本」と題して、1936（昭和11）年にイタリアがエチオピアへの侵略戦争を本格化した時、日本の代表的新聞3紙が、それぞれ独自にエチオピアの地図を発行した事実を簡単にまとめて紹介した。

今日でも日本でアフリカ関連の地図が発行されることは少なく、ましてや日本製エチオピア地図などはどこを捜しても市販されていないだろう。いったいなぜ、昭和の初期にエチオピアの地図が、それも最大78cm×54cmもの彩色地図が、日本で発行されたのかが、執筆の動機だった。

エチオピアの国名が、人口に膾炙し始めたのは、昭和に入ってから、それも外務省がエチオピアを含む東アフリカに、経済事情調査団を派遣した1928（昭和3）年ころからのようだ。この調査団の団長だった大山卯次郎は、その旅行記を『奇談一束 アフリカ土産』（1930）と題して出版したが、3年後には同じ内容で『エチオピア探訪報告』と「エチオピア」の国名を付して再版した。

「エチオピア」をタイトルにした方が、売れ行きが良いと判断したのだろうか、それなりの効果はあったようだ。

1931（昭和6）年には、エチオピアの外務大臣ヘルイが訪日した。ちょうど満州国承認をめぐる国内外ともに紛糾していた時期であり、政治的にも浜口内閣から若槻内閣へ、そして犬養内閣へと変わる不安定な時代だった。ヘルイはハイレ・セラシエ皇帝の命を受け、日本政府から借款供与を期待していたようだが、日本にそんな余裕はなく、目的は達成できなかった。それでもヘルイの

堂々とした態度や受け答え、気品ある風格は、日本人の持つ「野蛮なアフリカ人」のイメージを一新した。

帰国後ヘルイが著した日本旅行記『大日本』は、すぐさま日本語に翻訳されたが、その装丁の豪華さも手伝って、アフリカ人初の日本印象記として、各紙から好評を以て迎えられた。

エチオピアの国名が更に人々の口にのぼったのは、『大日本』出版の直前子爵の娘黒田雅子が、ヘルイに同行してきたエチオピア青年アベバに嫁入りすることが決定した（1934（昭和9））年のことだった。「エチオピア王子との結婚」と騒がれたこの話は、不幸なことに破談となってしまったが、黒田女史は一躍、「未開国エチオピアへ嫁ぐ勇氣ある女性」として、婦人雑誌の寵児となり、エチオピア国の名前と共に話題を提供した。

この間貿易促進、移住勧奨を目的としたエチオピア関連の本も出版され、日本人でエチオピアの国名を知らない者はいないといつてよいほど、日常的にエチオピアが話題となった。

「皇紀二千六百年」の日本同様、非白人ながら「三千年の歴史」を持つエチオピアが、ファシスト政権イタリアに侵略されるという非常事態が発生した時、日本のエチオピア熱は最高潮に達した。それが、新聞社がこぞって地図を発行した昭和11年である。

しかし、なぜこんなにも速く離れたアフリカのエチオピアの国名が、日本人に急速に馴染んでいったのか。筆者はこのエチオピアブームの裏には明治時代にひとつのエチオピア（アビシニア）像が形成され、それが昭和の知識階級に影響を与えていたのではないかと想像をめぐらしている。

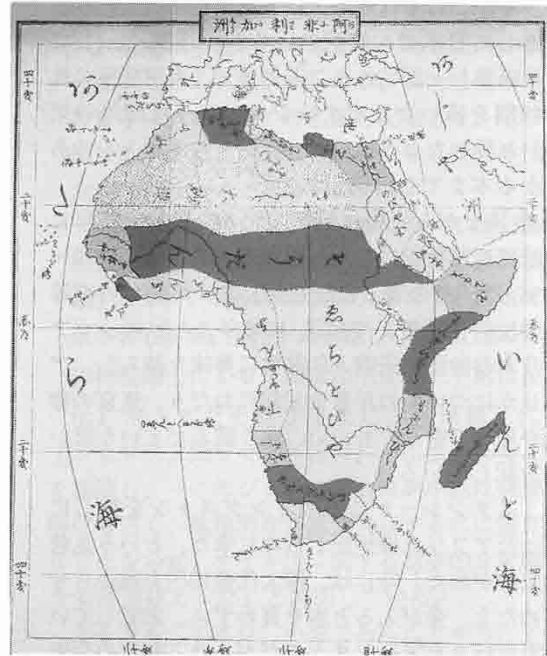
初期のエチオピア像

鎖国時代の江戸時代に、わずかながら日本に入ってきたアフリカについての情報は、ヨーロッパ人の書物を通じてであった。いつのころからエチオピアの名前が日本人に知られたかを特定するのは難しいが、幕末の洋学者渡辺崋山の自筆本『コウランツトルコ 亞弗利加和解』にも、「謁西都股亞」「亞比心域」とエチオピアとアビシニアが記されているという。

明治になって有名な福沢諭吉の『世界國盡』(1869)が出版され、「アビシニア」は「内留の流溯り、南に出でて信野國、又其南阿彌志仁屋」、エチオピアは「阿非利加の内地の様は知れざるも、大概かざる國境、南の方に越尾比屋、中に宗段、北に佐原の原と唱ふるは世界中の大砂漠」と、あたかも別の国であるかのように紹介された。更に、巻末に添付されたアフリカ地図には、アフリカ大陸中央部一帯の広大な未知の地域が、北から南に「あちをびや」と黄色で塗りつぶされ、「あびしにあ」は、「のびや國」と「そも里國」にはさまれた、エリトリアと現在のエチオピアの大半をカバーする地域として描かれた。

イギリスの探検家スピークやベイカーのナイル川水源の調査の結果を受けて、ナイル川は事実に近い形で描かれ、青ナイルはタナ湖とおほしき湖から流出している。しかし白ナイルは、ビクトリア湖とアルバート湖が、同じ大きさで描写され、二つの湖が水源となっている。『世界國盡』は、子供から大人まで幅広い層により、愛読された本だが、明治も20年代になると学生向けの『世界地理』の教科書には、ずいぶん詳しくアフリカが描かれるようになってきた。もちろんそのほとんどが、ヨーロッパ・アメリカで出版された書物の焼き直しだが、明治20年代に最も普及していた『萬國地理 全』には、アフリカに45頁が割かれアフリカの彩色地図も付された。ここでは、「あびしにや」は、山がちで海岸を持たない内陸国と記され、地図では現在の領土よりやや狭く描かれている。この頃には、ヨーロッパではアフリカの内陸部の状況も伝わり、『世界國盡』と比べると、情報量は飛躍的に増加している

「でむべあ」湖(タナ湖のこと?)が藍尼羅



【写真1】世界國盡』アフリカ地図

(青ナイル)の源であることや、住民は古来キリスト教を信じていること、1868年に「まぐらだ」で「せをどる」がイギリスに破れて以降政治が安定していないこと、また「たみぐる」「あんはら」「しょうあ」の3州があり、「あんはら」の「ごんだー」が首都であることを紹介している。

地理の教科書ではあるが、そこに居住している民族の描写にまで、筆は至っていない。

明治時代のアフリカの年

明治23(1890)は、日本のアフリカ研究史上記念すべき書籍が刊行されている。藤田軌達の訳によるスタンレーの伝記『蘇丹令』、佐々倉代七郎訳リヴィングストン伝『大将劉賓斯敦伝』、それに前野芳造の訳による『亞弗利加探検近世偉業』の3冊が出版されたのである。またエジプトとスーダンの内情を記した『内地干渉埃及慘状』も博文館から出版されている。

まさに明治時代のアフリカの年といってもよいほどの盛況ぶりだったが、これは、前年に探検家スタンレーが、スーダンでイスラム教徒に包囲され、困窮状態にあるといわれていたドイツ人エミン・パシャを救出した探検の旅記 *In Darkest Africa* (1890)の刊行に、大きな影響を受け

ている。この本は6年後に『闇黒亞弗利加』6巻本として日本でも翻訳されるが、「Darkest」は「最暗黒」と訳されることが多く、東京庶民の貧苦状態を描いたルポタージュが、『最暗黒の東京』と称したように、スタンレーのタイトルにあやかる本までも出現した。

余談ながら、国民新聞の記者を勤め、晩年には読売新聞社長になった新聞人馬場恒吾（1875～1956）は、その著『自伝点描』に、岡山での高等小学校時代（数えて14歳 1890年ころ）に、「アフリカの砂漠や未開人に非常に興味を持ち」、アフリカについての洋書を父親にねだり、東京の書店から取り寄せてもらい、貪り読んだという思い出を記している。

「スタンレーが、リヴィングストンを捜しに行ったアフリカ探検記が日本に来た、という丸善の広告が出た」時には、購入代金10円を親からせしめた上、金が入ると本を買わずに、志望していた東京行きを实行しようのだが、地方在住の少年にまで、スタンレーやリヴィングストンの探検を通じて、アフリカは思いのほか身近な存在となっていた。

ついでながら、馬場が購入しようとしたスタンレーの著書は、年代的に見てスタンレーの『リ

ヴィングストン発見記』(How I found Dr. Livingstone, 1872)ではなく、まさにエミン・バシャ救出のIn Darkest Africaにほかならない。

さて上記4書のうち、エチオピアについての記述が多い『亜弗利加探検近世偉業』は、ヨーロッパ人によるアフリカ探検を総合的に紹介しようとした初めての書物である。同書は前後二編のワンセットで、前編は明治23(1890)年に、大阪の千葉三英堂で出版され、ヨーロッパ人の古代のアフリカに関する関心から、マンゴー・パーク、クラブパートンに至るまでの探検家群像を追った。巻頭にはスタンレーの肖像画を掲げ、後編はこのスタンレーやリヴィングストンを取り上げ、翌年24年の正月に刊行予定と広告したが、国会図書館にも原本はなく、果たして刊行されたものかどうかは定かではない。

『亜弗利加探検近世偉業』前編の第二章は、アビシニアについて取り上げた。

- ・アビシニヤ
- ・往昔歐羅巴人ノアビシニヤ旅行
- ・コヅキルハム及アルヴァリーノ渡航
- ・アビシニヤノナイルニ於ケルベイノ解説
- ・葡萄牙國僧侶輩渡航
- ・ブルースノアビシニヤ旅行其冒険及アビシニヤノナイル河ノ水源へ到着
- ・ブルースガ記行ノ刊行及世ノ非難
- ・ブルースノ死期

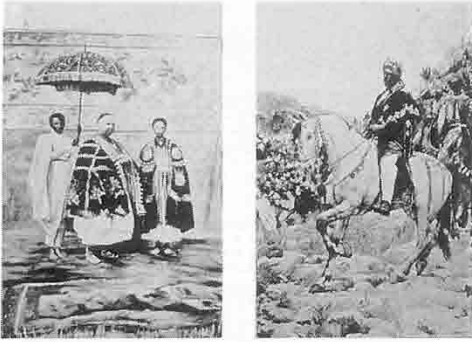
の内容で、エチオピアの概況とヨーロッパ人の渡航歴が12頁にわたり紹介された。記者の前野芳造は、序文でスタンレーが前年にスーダンでエミンバシャ救出に成功したことに感銘し、本書の訳を思いたったと記している。原書が何だったかは不明だが、1868年のマグラダの戦いでイギリス軍がアビシニア軍に勝利を収めた後ただだけに、内容は1770年に青ナイルの水源を確認し『ナイル探検』を著した、イギリスの探検家ブルースの旅行の紹介に重点を置いている。

世界各国案内書『世界国勢要覧』

明治34(1902)年に博文堂から刊行された、雑誌『太陽』の臨時増刊号『世界国勢要覧』は、明治になってから出版された世界各国便覧のうち、もっとも詳細に各国の



[写真2. 『亜弗利加探検近世偉業』表紙]



【写真3.『地理風俗・世界写真帖』(明治39年)に掲載された「アビシニア王」と「王妃」の写真】

情報を記載したものといえる 手元にあるのは、一年後に改定された『訂正増補世界国勢要覧』だが、ここには大日本帝国を初めアジア9ヶ国、ヨーロッパ20ヶ国、アメリカ18ヶ国とともに、アフリカ諸国4ヶ国が名前を連ねた。再版に当たり、編集部は、内容の誤謬を正し新たな情報を加えたというが、残念ながらアフリカ諸国については「微弱の小国にして、信憑すべき材料なき」ため、ほとんど改定することはできなかったと説明する。アフリカ4ヶ国とは、リベリア合衆国、コンゴ独立国、モロッコ帝国そしてアビシニア帝国で、全部合わせても2頁半にも満たない情報量だ。

コンゴ独立国とは、言わずと知れた悪名高いベルギー王レオポルド二世の私的植民地で、曲がりなりにも「独立」を保っていた国は、3ヶ国だけだったが、このうち明治人に最も馴染みのあった国名は、アビシニア帝国だっただろう。

アビシニアについての説明は省略するが、いずれにしろ、ヨーロッパで発行された年鑑類からの引用に過ぎず、記載内容はいささか古い。1889年にイタリアと締結したウッチャリ条約締結による保護国化と、翌年の列国による実質的独立承認については触れているが、1896年にイタリアを敗北に追い込んだアドワの戦いについては、触れていない。

アビシニアの王子ラセラス

広島電気大学の泉谷寛教授は、18世紀のイギリスの文豪サミュエル・ジョンソンの研究を長年続けている。同教授著『健闘の文豪ジョンソン』(溪水社、広島、1994)は、その副題が「明治期『ラセラス』の片影」とあるだけあって、明治時

代に日本で刊行された、ジョンソンの『ラセラス』研究に多数の頁を割いている。

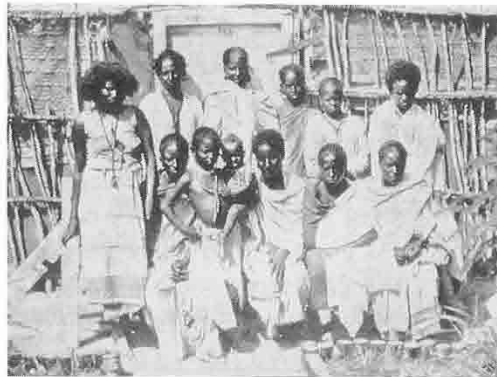
実はこの『ラセラス』こそ、明治時代の日本の青年にアビシニアの名前を記憶させ、昭和初期にエチオピアブームを起こさせる原因を作った本ではないかと思うのだ

この本とアビシニアの関係については、西野照太郎が、「明治期における日本人のアフリカ観」の中で、1884年に英語テキストが日本で出版され(85、90、1912年に再版)、その後1890年に田村左衛士による『垂徽志尼垂ノ王子刺世拉斯伝』が、またその3年後に、大島國千代訳『ジョンソン氏ラセラス注釋』が出版されたことを指摘し、「このジョンソンの教訓小説は執筆の時代も古く、地理的な知識を吸収するには余り役に立たないが、ナイル川に関する初歩的な常識をうる効果はあった」と説明している。

そもそもこの本は、小説であることから、アフリカ関係で言及されることはほとんどないが、山田一廣の『知っておきたいエチオピアの実像』(ほるぶ出版、1992年)では、1884(明治14年)に田村左衛士が『アビシニアの王子ヨハネス伝』を訳し「エチオピアとナイル川について初歩的知識を紹介」したことになっている。

しかしながら、正しくは上述のとおり、1884年に出版されたのは翻訳ではなく英語版で、田村が訳したのは1890年(明治23年)『アビシニアの王子ラセラス伝』である。

とにかく泉谷の『健闘の文豪ジョンソン』により、いかにジョンソンの『ラセラス』が明治期に広く読まれたかを見てみよう。泉谷によれば、明治期に出版された『ラセラス』のうち、判明しているものは次頁の表のとおりである。



【写真4.「アビシニア土人」の写真。『世界写真帖』】

実に明治時代に7種類の翻訳がなされている。参考として挙げたのは、昭和になってから、新しく翻訳されたもので、訳者の朱牟田は、明治時代にこの本が翻訳されていたことにはまったく気づかず、翻訳中に友人にその存在を指摘されたと、あとがきに記している。

なお、西野が言う大島國千代の『ジョンソン ラセラス傳注釋』は、いわば学生向けの、教科書の虎の巻で、直訳と注釈を付したものであり、翻訳書のなかには含めていない。7冊の翻訳数に驚くのはまだ早い。西野照太郎が指摘しているように、この『ラセラス』は明治時代の中等・高等英語教育の教材として広く使われた。

泉谷の研究によれば、当初は原書を輸入して利用していたものらしく、明治15年ころには、すでに日本で出版された形跡もあるらしいが、その発行が確認されているものだけで、原著*The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*は、1884年に東京帝国大学文学部から出版されたものをはじめとして、1885年にはBookseekers AssociatedとTokio Publishing Co.の2ヶ所から発行され、その後1886,1889(2種類)、1890, 1891, 1892, 1893, 1897, 1911, 1912年にそれ



〔写真5.「王子羅世刺斯傳」(明治38年)表紙〕

それ異なった出版社から刊行され、またその訳者注釈者は当時の英文学の著名学者だったという。泉谷は、明治人の回想録を引用し、英語の教科書として『ラセラス』が明治10年代から広く使われてきたことを紹介している。(続く)

(あおき すみお 国際協力事業団)

表 『ラセラス』の翻訳本一覧 (泉谷 寛による)

| 訳者 | 発行所 | 書名 | 発行年(明治) |
|---------------|----------|-------------------------------|----------------------|
| 1. 草野宜隆(丈山居士) | 奎文堂 | 王子羅西拉斯傳記(一) | 1886年(19年) |
| 2. 福井有(守愚山人) | 津・豊住謹次郎 | 羅世良斯上巻 | 1889年(22年) |
| 3. 田村左衛士 | 文求堂 | 亜微志尼亞ノ王子刺世拉斯伝 | 1890年(23年) |
| 4. 渡辺松茂 | 積善館 | ラセラス傳注釈・刺西拉斯経歴史 (亜比斯尼亞国王子) | 1890年(23年) |
| 5. 新井清彦 | 文港堂 | 刺世拉斯史釈義 (直訳付き 上下二巻) | 1894年(27年) |
| 6. 芝野六助 | 大日本図書 | 王子羅世刺斯傳 | 1905年(38年) |
| 7. 坂本栄吉 | 内外出版協会 | ラセラス王子物語 | 1909年(42年) |
| (参考) 朱牟田夏雄 | 思索社・吾妻書房 | 幸福の探求—アビシニアの王子ラセラスの物語 | 1948, 1962年(昭23・37年) |